

第1章 東晋南朝における山水観の展開

はしがき

本章の目的は、文献中に残された山水の語を再検討することで、東晋南朝における自然認識の転換を新たに論じるものである。

南朝より前の正史にみえる「山水」の語について、『史記』や『漢書』では、単に「山の水」や「山と水」を指す語に過ぎなかった。しかし、時代を経て、「山水」の意味する範囲は次第に拡大していき、南朝に至ると、人工的に配置された築山と水辺や、山川を描いた絵画までを「山水」と表現するようになった。このような「山水」の語義の変化は、どのようにして起こったのであろうか。本稿では、「山水」の語義の変化を指摘することで、当時の自然認識の転換を明らかにしてみたい。

筆者は、以前に、隠逸（官職に就かず、政治権力と一線を画した知識人）にとって、山水（ここでは、山と水のある場所）とは何であったのか、ということ、拙稿「廬山における隠逸の山水—劉宋建国期の白蓮社を中心に—」¹のなかで考察した。そして、これらのなかで、隠逸とは、有力な一族や、廬山における白蓮社のような文化的グループに属していたこと、また、山水とは、有力な人々（高官や知識人、僧）の交流の場、かつ、経済活動の場のひとつであったこと、そして、隠逸や山水は、世俗や都市と隔絶されたものではなく、むしろ密接な関係をもっていたことを述べた。

以上のように、隠逸は、政治的に有力な一族に属しながら、官途にはつかず、高度な知識を有して周囲の知識人と交流していた実態をもつが、隠逸と表現される行動や人物について、明確に概念付けることは困難である。しかし、上田武が「中国古代の隠逸思潮と陶淵明」(上)(下)²のなかで、両晋の隠逸思想について、詳細な考察をおこなっている。上田の研究によれば、隠逸には、大きく分けて二つの流れがある。ひとつは、『論語』や『莊子』にみられる隠逸に共通する、衆に優れた賢者が、有道の政治が行われていないと判断した場合の隠逸である。もうひとつは、西晋のころに誕生した、自我の主張や個性の強調、自己の性質を根拠とする隠逸である。さらに、東晋になると、西晋のころのように隠逸の本質的意味が問われなくなり、隠逸にまつわる諸現象に人々の関心が集中するようになり、隠逸が風俗化した点を指摘する。

劉宋期においては、山水とは、すでに単なる自然の土地のかたちを示す語ではなく、風俗化した隠逸の活動の舞台として、また、有力一族の荘園経営の土地として、世間や人間の活動と密接な関係をもった、文化的、経済的なものへと変化していることは明らかである。このような山水観の変化をもたらしたのは、何であったのだろうか。

このような山水の問題を考える際に、大室幹雄の研究が出発点となる。大室は、『園林都市—中世中国の世界像—』³のなかで、南朝における山水観の変化を以下のように説明している。

すなわち、晋王朝の南遷によって、江南に移動した文人たちは、「華風」文化の精髓であった。彼らが南方へと避難することによって、文明世界の北方の中心たる「中国」の文化がいきよに江南へと移転することとなり、これによって、江南世界は、「新しい魅力に満ちた文化を創造した時代」をむかえた⁴。

大室が指摘する「江南の新しい魅力」のなかに、山水の魅力も含まれており、山水の魅力は、中原から移動してきた人々によって発見され、南朝において山水観が大きく展開するに至った、と考えられる。

大室の見解とは別個に、時国強は「漢魏六朝山水観念的変遷」⁵のなかで、以下のように述べている。中国において、山水を論じるにあたり、前漢頃まで一般的であった「比徳論」（「論語」の「知者樂水、仁者樂山」を基礎とし、山水の姿を「徳」になぞらえる説）から、塩鉄論に見られるような「致利説」（山水を軍事・経済の面から、実際的な利益にそくして論じる説）に、徐々に転向していった。また老莊思想や玄学の見方にたち、山水の属性中に「道」を見出す思想とは別に、後漢頃から、「山水」そのものを見る審美的な見方が誕生した。このように、山水を、儒教的な「徳」や老莊思想的な「道」になぞらえるのではなく、致利的、審美的なものとして認識するようになり、山水詩や山水画が誕生したと、時国強は指摘する。

また、マイケル・サリヴァンは、『中国山水画の誕生』⁶の中で、以下のように論じている。山水画が独立した芸術として発展するうえで、決定的時期が到来したのは、漢が崩壊する前後の大混乱の時代である。儒教的正統主義の衰退、道教的自然崇拜の興隆、より温暖な環境である長江流域への人々の移動が、自然の驚異に対する新たな覚醒を促した。混乱によって、政治や社会から解放された詩人・学者は、自然を愛でる余暇とともに、純粋に芸術のためだけに芸術を楽しむ余暇を手に入れ、その結果、美学が誕生した。

なお、南朝建康については、都城史の観点から、妹尾達彦が「江南文化の系譜―建康と洛陽（一）（二）」⁷の中で詳述している。特に山水については、建康における「美的景観の誕生」として、世俗的・個人的・内向的な思想による審美的価値観に基づいた山水の価値が、建康における政治、文化、地域的つながりを支える大きな要素になっていたことを指摘しており、示唆に富んでいる。また、精密な建康の復原推測図を提示されており、建康がいかに山と水に抱かれた都市であったかを示している（本稿 112、113 頁に引用）。

以上の大室幹雄、時国強、マイケル・サリヴァン、妹尾達彦各氏の指摘、すなわち、①王朝の南遷による北人たちの華北とは異なる山や河川の自然景観の魅力の発見、②従来の儒教的、老莊思想的山水観からの脱却、③漢の崩壊前後の混乱（儒教的正統主義の衰退、道教的自然崇拜、より温暖な環境である長江流域への人々の移動）による知識人の解放、④個人的・世俗的審美観の進展等は、南朝における「山水」の語の展開を考察するにあたり、示唆的である。

ここで問題となるのは、山水と密接に関連する「風景」の語義の変遷である。小川環樹は、南朝に登場する「風景」の語の原義は「風と景（ひかり）」（light and atmosphere）を

指し、「景」の語は、現在のような目に見え心で認識する景色 (landscape or scenery) の意味として用いられたのではなく、風景の語が今日いう景色 (scenery) の意味になるのは、唐中期以後であることを明らかにした⁸。小川によれば、南朝の文人は、まず、山水の中に風と光を見出し、それをふまえ、中唐の詩人によって、目の前に広がる景観が、今日いう風景 (景色) として認識されるようになったのである。

確かに、小川の精緻な論証には説得力がある。ただ、「風景」の語ではなく、「山水」の語に注目したとき、中国における風景 (景色) の発見は、中唐ではなく、南朝の時期にまでさかのぼることが論証できると思う。要するに、本稿で論じるのは、山水の語の変化に注目することで、中国における「風景の発見」の時期が南朝に他ならないということである。小川が論証したように、風景の語が今日の風景 (景色) を意味するのは、9 世紀になってのことであったが、従来の山水の語が、今日の風景 (景色) に変化することを手がかりに、南朝における風景の発見を確認することができるのである。(風景の問題に関しては、「第 3 章 建康の山水庭園と自然に対する知識人の視点」において再び述べる。)

本章では、まず、第 1 節で、正史中に見える「山水」の語の使用例を検討し、南朝において、山水の語で表現される自然認識がどのように変容していったのか、すなわち、山水とは、単なる「山の水」を示す語だったものが、「陰しい地形」や「山と水のある土地、風景、その雰囲気」を広く意味する語へと変化していく過程を述べる。「山水」の語の使用例をみていくことによって、人を囲む自然、とりわけ山と河川が生み出す環境のどのような側面が、その当時注目されていたのかを明らかにする。

次に、第 2・3 節で、山水が具体的にどのようなものであったのか、史料をもとに考察し、山水が、山水に関連する文化を作り上げた有力者や知識人にとって果たしていた役割について述べる。

第 1 節 正史中にみえる「山水」の語の使用例

『史記』から『新唐書』にいたる 16 種の正史のなかにみられる、「山水」の語の使用例を整理したものが、表「正史中にみられる『山水』の語の使用例」である。この表にみられる「山水」の語の意味するものとして、ほぼ以下の 5 つが挙げられる。すなわち、(1) 水や河川、(2) 山と河川を持つ地形、(3) より広く山と河川を持つ地域全体、(4) 今日いう風景、(5) 山水を描く絵画である。これらの例は、「山水」の語で表現される自然環境の持つ多様な性質のうち、当時どのような面が注目されていたのかを明らかにするものといえる。

まず、「山水」の語が、山から流れ出る水や河川を意味する例を挙げる。『漢書』卷 27 上、五行志、水 (北京：中華書局版 1346 頁、以下正史の引用はすべて中華書局版) には、

文帝後元三年秋、大雨、昼夜不絶三十五日。藍田山水出、流九百余家。

文帝後元三年 (前 163) 秋、大雨が昼夜絶えず 35 日間降り続いた。藍田では山の水が

押し寄せ、900 あまりの家が流された。

とある。ここでは、「山水」の語は文字通り「山の水」の意味しか有しておらず、情緒的な表現も見られない。このように、「山水」の語が単に山や河川を表す例は、『漢書』に多く見られる。

次に、「山水」が、山や河川が形成する地形を示している例で、『三国志』魏書、巻 10、賈詡伝 (331 頁)には、

呉、蜀雖蕞爾小国、依阻山水、劉備有雄才、諸葛亮善治国、孫権識虚实、陸議見兵勢、
拠險守要、汎舟江湖、皆難卒謀也。

呉や蜀は、小国だが、山や河川を拠り所としている。劉備は優れた才能があり、諸葛亮はよく国を治め、孫権は真偽を見分け、陸議は兵の情勢を見極めることができる。

険しい地形に依拠して要所を守り、河川や湖に水軍を配備しているので、どれにもわか
かに攻略することは難しい。

とある。この記事は、魏の文帝（在位 220 - 226）が天下を統一しようとし、呉と蜀のどちらを先に攻めるべきか、太尉であった賈詡（147 - 223）に問うたときの賈詡の返答の一部である。山水は、「拠險守要、汎舟江湖」、すなわち、要害と水軍の基盤となる地形を意味している。このように、「山水」の語が軍事的な要所となる地形を指す語として用いられる例は、『三国志』によく見られる。これは、戦乱期にあたって戦略的観点から山水が重視されたことによると考えられる。

また、前掲の例のように「山水」の語が山と河川という土地の形状のみを指すのではなく、山と溪谷を包括する土地そのもの、その場所全体を広く意味する例がある。『晋書』巻 79、謝安伝 (2072 頁)には、

寓居会稽、与王羲之及高陽許詢、桑門支遁遊处、出則漁弋山水、入則言詠属文、無处
世意。

会稽に仮住まいし、王羲之や高陽の許詢、僧の支遁とともに歩きまわり、屋外では山水で魚や鳥を捕り、屋内では詩歌や文章を作り、世俗の意にかまうことがなかった。

とあり、また、『晋書』巻 104、載記、苻朗伝 (2936 頁)には、

及為方伯、有若素士、耽翫經籍、手不釈卷、每談虚語玄、不覺日之將夕、登涉山水、
不知老之將至。

地方の長官となっても、まるで無官の人のようであった。経籍に耽り、巻を手放すことがなく、玄談（世俗を離れた老荘思想に基づく談話）をするたびに、日が暮れようとしているのにも気づかず、山水に登り歩き回って、老いがまさに至ろうとしていることにも気づかなかった。

とある。前者は、東晋の高官・謝安（320 - 385）の仕官以前の記事で、名門の王氏出身で書聖として有名であった王羲之や、道家に精通した徴士（学徳が高く、朝廷から招かれながら官職に就かない士）・許詢、高名な仏僧・支遁らと交流したことが記されている。後者は、前秦第三代皇帝苻堅（在位 357 - 385）の従兄の子で、383 年の淝水の戦いの翌年に前

秦から東晋に降った苻朗のエピソードである。どちらも、超俗的な行動の舞台として、山や河川のある場所を「山水」と表現している。

このような山水の概念をさらに展開させ、山と河川が存在する状態やその風景、またその趣を含めて「山水」と表現する場合もある。『宋書』巻 72、文九王、建平宣簡王宏伝（1858 頁）には、

太祖寵愛殊常、為立第於鷄籠山、盡山水之美。

太祖は（宏を）とりわけ寵愛し、（宏の）ために鷄籠山に宅を建てた。その宅は、山水の美をきわめた。

とある。太祖とは、劉宋の第三代皇帝文帝（在位 424 - 453）で、その治世は元嘉の治といわれ、国勢は比較的安定していた。鷄籠山は、華林園の北、玄武湖の南にある宮城に近接した山で、そこに文帝は七男の劉宏（434 - 458）のために山と水辺の趣きをいかした邸宅を造営した⁹。

また、『梁書』巻 8、昭明太子伝（168 頁）には、

性愛山水、於玄圃穿築、更立亭館、与朝士名素者遊其中。

性格は山水を愛し、玄圃園に山水を穿ち築き、そこにさらに亭館を建て、朝廷のものと名高い非官人とともに、その中で遊んだ。

とある。これは、梁の初代皇帝武帝の長子で、『文選』の編纂でも有名な蕭統（501 - 531）が、東宮内に造営された玄圃園において文人を集めて交流した記事である。玄圃園とは、南齊の文惠皇太子（458 - 493）が改修して「妙極山水」とした庭園¹⁰で、以降南朝歴代の宗室が宴会を開催したり、談論をしたりする官人・知識人の交流の場であった。このような「山水」の例からは、自然の山と河川が有する情緒や風情をいかした人工的空間が想像され、山と水から構成される景観的美しさや、その趣きを広く「山水」と表現しているのだといえる。なお、山水をテーマとして造園された庭園を単に「山水」としていると思われる表記¹¹もあり、これは、後述する「山水を題材とした絵画」を「山水」と表記する例と同様に、山水の美的概念が一般的に定着していることを前提とした表記であると考えられる。

最後に、山水を描いた絵画を「山水」と表記する例を挙げる。『旧唐書』巻 60、長平王叔良附李思訓伝（2346 頁）には、

思訓尤善丹青、迄今絵事者推李將軍山水。

李思訓は、絵画にとくに優れ、世に絵事をするものは、李將軍の山水画を推称した。

とある。李思訓（653 - 718）は、唐の宗室であり、玄宗（在位 712 - 756）のとき左羽林大將軍となったため、李將軍という¹²。唐代においては、絵画のジャンルのひとつとして既に「山水」が定着していたことがわかる。南朝を通じて、山と水から構成される風景がもつ芸術性が、詩文や造園に加えて絵画の分野においても認識されるようになったのだといえよう。

以上、表から考えられる「山水」の意味する具体的な事象を 5 つ述べた。その他、表の

傾向として、『三国志』よりあとの時代の正史では、山や水がある土地や、そのような状態・風景を広く意味する場合が多いこと、南朝と北朝では、南朝のほうが「山水」の語の登場件数が多いが（『南史』26件、『北史』12件）、「山水」という語がどのような意味で用いられているかについては、大差なく、すなわち、南朝、北朝とも同様の山水観が存在していたと考えられること、が読み取れる。また、『宋書』にみえる「山水」の語は、隠逸との結びつきが強い¹³。このことは、5世紀ごろ「山水」の語と隠逸が結び付けられて想起されるようになったことを示しており、隠逸的な山水観が定着していく過程にあったと考えられる。

第2節 知識人の山水観 ―『世説新語』を中心に―

『世説新語』は、劉宋の劉義慶の撰で、全36篇から成る。この36篇の中に「山水」の語は2例しか見られない¹⁴。しかし、山や河川に関する当時の知識人たちの価値観をあらわしていると考えられる記述は少なくない。

『世説新語』賞誉第八、8（中523頁）に、

見山巨源、如登山臨下、幽然深遠。

山巨源（山濤、205 - 283）を見ると、まるで山に登って見下ろすようで、奥深く遠い思いがする。

とあり、また、『世説新語』德行第一、8（上24 - 5頁）に、

客有問陳季方「足下家君太丘、有何功德、而荷天下重名」。季方曰「吾家君譬如桂樹生泰山之阿、上有万仞之高、下有不測之深。上為甘露所霑、下為淵泉所潤。当斯之時、桂樹焉知泰山之高、淵泉之深、不知有功德与無也」。

ある人が陳季方（陳謚）にたずねた。「あなたの父上の太丘（陳寔、104 - 187）は、どのような功績や徳行があつて、天下の名声を荷っているのか」。季方が答えた。「私の父は、例えば泰山の一角に生えている桂樹のようなもので、上には万仞の高さがあり、下には測り知れない深さがあり、上は甘露にうるおされ、下は淵泉にうるおされている。このような場合に桂樹はどうして泰山の高さや泉の深さを測り知ることが出来るだろうか。父上に功績や徳行のあるなしなどということはわからない。」

とあるのは、道理を山水にたとえているもので、山水そのものの価値を述べるものではない。南朝より以前から存在した山水の価値観に基づく表現である。

一方、『世説新語』言語第二、31（上121 - 122頁）に、

過江諸人、每至美日、輒相邀新亭、藉卉飲宴。周侯坐而歎曰「風景不殊、正自有山河之異」。皆相視流淚。

江南の地に移ってきた人々は、麗らかな日になると連れ立って新亭へでかけ、草の上で酒盛りをした。周侯（周顗、269 - 322）は、酒宴のなかばで嘆いて言った。「風の色、日の光は同じようだが、まさしく山河は違っている。」皆顔を見合わせて涙を流した。

とある。新亭は、建康の南西、長江のほとりの高台にあり、建康防衛の要所のひとつであると同時に、見晴らしがよく、しばしば宴会が開かれた場所でもある。このように、「風景」「山河」そのものを愛でながら酒宴を楽しむということは、南朝において、知識人たちのあいだでよく行われた。

また、『世説新語』言語第二、86（上 186 頁）には、

顧長康従会稽還、人問山川之美、顧云「千巖競秀、万壑争流、草木蒙籠其上、若雲興霞蔚。

顧長康（顧愷之、344 - 405）が会稽から帰ってきた。ある人が会稽の山河の美しさをたずねると、顧長康は答えていった。「千の巖が高さを競い、万の谷が流れを争う。草木がその上に生い茂っているさまは、まるで雲霞がたちこめているかのようである」。

とあり、『世説新語』第十八、棲逸 11（下 830 頁）には、

康僧淵在予章、去郭数十里、立精舍。旁連嶺、帶長川、芳林列於軒庭、清流激於堂宇。乃間居研講、希心理味、庾公諸人多往看之。觀其運用吐納、風流轉佳。加已處之怡然、亦有以自得、声名乃興。後不堪、遂出。

康僧淵¹⁵が予章にいたとき、城郭から数十里離れたところに精舎を建てた。連なる山並に沿い、大きな川をめぐらし、芳林が庭先に連なり、清流が軒さきに音をたてて流れていた。その中で閑居して研究講授し、仏理にふけた。庾侯（庾亮、289 - 340）らはたびたび出かけて彼をたずね、彼の日ごろの動作談論を見ると、その風流は、ますます立派なものがあつた。しかも、その境地にあつて心楽しく満足していたので、名声は一段とあがつた。後には耐えきれなくなってそこを出た。

とある。自然の山水に価値や美を見出している様子は、東晋南朝以降に展開していく山水観とほぼ同じであるといえる。このような山水観の例は、『世説新語』のなかでも、王朝の南遷以後にしか見られず、山水そのものに価値を見出し、隠逸的な趣きを楽しむことは、江南で生まれた山水観に基づくものであると考えられる¹⁶。

また、このような山水の隠逸的な趣きについて、『建康実録』巻 8、晋中、孝宗穆皇帝、王羲之（中華書局版 222 頁）には、

乃称疾罷郡、於父母墓前自誓、去榮祿、畢志林泉。遂任性弋釣、与許邁等供修服食之事。遊名山、不遠千里。

そこで、病を称して会稽太守を辞職し、父母の墓前で、榮祿を去って志を林泉に終えることを誓った。ついに性情のまま行動して、鳥を捕まえたり魚を釣ったりし、許邁らとともに道家の養生法を修めた。名山に遊ぶこと、千里も遠しとはしなかった。

とある。王羲之は、王述と仲が悪かったが、王述の方が朝廷における出世が早かったため、朝廷を去ることにした。その後の王羲之の様子が書かれている。「林泉」の概念、すなわち、山水の隠逸的な趣きは、朝廷における榮祿とは反対のものであつたことがわかる。

ただし、南朝における山水は、隠逸的な趣きを楽しむことのほかに、政治的有力者たちの豪華な楽しみとして流行していたという一面もあつた（次節で詳述）。このような豪華な

楽しみとしての山水には、豪華な食事や女楽、女伎、鼓吹などが付随することが多く、隠逸的な趣きを楽しむことを目的とした山水とは、対照的である。『晋書』巻 64、会稽文孝王道子伝（1734 頁）には、

牙為道子開東第、築山穿池、列樹竹木、功用鉅萬。道子使宮人為酒肆、沽賣於水側、与親昵乘船就之飲宴、以為笑樂。帝嘗幸其宅、謂道子曰「府内有山、因得遊矚、甚善也。然修飾太過、非示天下以儉。」道子無以對、唯唯而已、左右侍臣莫敢有言。帝還宮、道子謂牙曰「上若知山是板築所作、爾必死矣」。

趙牙は、司馬道子（364 - 403、孝武帝の末弟）のために東第を建造し、山を築き、池を掘り、樹木や竹林を植えて大金を費やした。また、司馬道子は、宮人を使って酒店をつくり、水辺で売買させた。司馬道子は親しい者とともに船に乗ってそこへ行き、酒宴をして笑い楽しんだ。孝武帝（在 372 - 396）は、かつてその邸宅を訪れ、司馬道子に「府内に山があつて遊び眺めることはとても善い。しかし、修飾があまりに過ぎると天下に儉約を示せない」と言った。司馬道子は、帝の意に逆らわず、従順に返事をするだけで、左右の近臣もあえてものを言うものはなかった。帝が去ってから、司馬道子は、趙牙に「皇帝にもしこの山が版築で造ったものだと知れたら、あなたは死ななければならない」と言った。

とある。このように、山と水辺から構成される空間は評価の対象となったが、隠逸的な趣きからかけはなれた贅沢な山水は、有力者の遊びや接待に用いられ、ときに世間から批判されることもあった。このような豪華な山水は、南朝に見られる隠逸的山水観とは、また別の種類の山水観である¹⁷。

すなわち、山水の価値には、当時、自然そのものの趣の中に価値を見出す隠逸的な側面と、栄華を証明するための富としての価値を重視する驕奢的な側面の 2 つの面が存在したといえる。『南史』巻 49、孔珪（1215 - 1216 頁）には、

珪風韻清疏、好文詠、飲酒七八斗。与外兄張融情趣相得、又与琅邪王思遠、廬江何点、点弟胤並款交、不樂世務。居宅盛營山水、憑几独酌、傍無雜事。門庭之内、草萊不翦。中有蛙鳴、或問之曰「欲為陳蕃乎」。珪笑答曰「我以此當兩部鼓吹、何必効蕃」。王晏嘗鳴鼓吹候之、聞羣蛙鳴、曰「此殊聒人耳」。珪曰「我聽鼓吹、殆不及此。」晏甚有慚色。

孔珪は、気高い人柄で大らかで清く、文章を好み、飲酒することは七、八斗であった。外兄の張融と性情や趣味を同じくし、また、琅邪の王思遠や廬江の何点、何点の弟の何胤ともみな仲がよく、世俗的な仕事をしまなかつた。居宅に盛んに山水を造営し、机にもたれて一人で酒を酌み、雑事にとらわれることがなかつた。門庭の中は、草が茂って刈らなかつたので、蛙が鳴いており、ある人が孔珪に「陳蕃になりたいのか」とたずねた。孔珪は笑って、「私にとってはこれが兩部の鼓吹なのだ。陳蕃にならっているとはいえまい」と答えた。王晏がかつて鼓吹を鳴らして孔珪をたずね、多くの蛙が鳴いているのを聞き、「実にやかましい」と言った。孔珪は、「私には鼓吹を聴くこ

とのほうが、これよりもひどい」と言った。王晏は決まり悪げだった。
とあり、また、前に引用した『梁書』巻 8、昭明太子統（168 頁）には、
性愛山水、於玄圃穿築、更立亭館、与朝士名素者遊其中。嘗泛舟後池、番禺侯軌盛称
「此中宜奏女樂」。太子不答、詠左思招隱詩曰「何必絲与竹、山水有清音」。侯慚而止。
昭明太子は山水を愛し、玄圃園に山水を穿ち築き、さらに亭館を建て、朝廷のものや
名高い非官人とともに、そのうちで遊んだ。かつて後池に舟を浮かべていると、番禺
侯軌が盛んに「この中に女樂があればよい」と言った。太子は答えず、左思の招隱詩
を詠じて「どうして管弦楽が必要だろうか、山水には清音がある」と言った。侯は恥
じてやめた。

とある。孔珪（孔稚珪、447 - 501）は、会稽土着の有力一族である孔氏の人である。陳蕃
とは、後漢の人で、雑草が生い茂ったまま自宅に客を迎えていたが、陳蕃がそのようにし
ていたのは、大丈夫が家の掃除をすべきではない、という理由からで、自然のなかに趣き
を見出していた孔珪とは異なる。

以上の例からは、隠逸的雰囲気をもつ山水そのものを美として楽しむ価値観と、山水
を贅沢な遊興の修飾の一部として用いる価値観があったことがわかる。

第 3 節 東晋南朝における山水の諸相

第 1 節で論じたように、江南で生まれた自然認識をめぐる新しい価値観、すなわち、風
景の誕生は、南朝における山と水の自然環境としての役割にも変化をもたらしたと考えら
れる。南朝における山水の具体的役割は、軍事的目的、政治的目的、経済的目的、遊興的
目的やその他、学問、宗教¹⁸、趣味のための活動の場として、多岐にわたる。江南へと遷都
した当初、まず為政者たちに評価されたのは、建康の都市としての機能を支える、山水の
軍事面と経済面であろう。長江・秦淮河・玄武湖と鍾山等の丘陵は、建康防衛のために有
効な地勢であり、河川は水軍の拠点となり、鍾山は軍の駐屯地としても機能していた¹⁹。

経済・商業面における有力一族による荘園の経営は、東晋南朝を通じて大きな経済的基
盤となっており、都市近郊の利便性のよい山水は、有力者によって開拓・占有された。

一方で、新しい価値観、すなわち風景の誕生によって、山水は私的な趣味のための場や、
宴会のための場としても用いられた。『宋書』巻 93、隱逸、宗炳（2278 頁）に、

妙善琴書、精於言理、每游山水、往輒忘歸。

琴や書を得意とし、言理に精通していて、山水に遊ぶたびに、出かけては帰るのを忘
れた。

とあるように、知識人が遊する場となっていた。また、『晋書』巻 80、王羲之伝（2099 頁）
には、

永和九年、歲在癸丑、暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭、修禊事也。群賢畢至、少長咸
集。此地有崇山峻嶺、茂林修竹、又有清流激湍、映帶左右、引以為流觴曲水、列坐其

次。雖無絲竹管絃之盛、一觴一詠、亦足以暢敘幽情。

永和 9 年（353）癸丑の歳、3 月初めに、会稽山陰の蘭亭で禊事を行った。大勢の知識人、老いも若きもみな集まった。この地には、尊い山や峻険な嶺、生い茂った林や見事な竹があり、また、激しい流れの清流があり、左右に映えている。その水を引いて觴を流す曲水をつくり、並び座した。絲竹管絃の盛はないが、一觴一詠して、幽情を述べあうに足りる。

とある。また、前に引用した『梁書』巻 8、昭明太子統伝からは、隱逸的山水を人工的に造営して、幅広い知識人の交流の場としていたことがわかる。官職につかない有力な知識人は、僧と隱逸を合わせると、建康とその周辺に当時相当な数がいたように思われる。彼らは、役所の門をくぐることは嫌ったが、隱逸的趣きのある山水において、官人と交流することは避けなかった。

さらに、前説で述べたように、自身の富や榮華を証明するための修飾的な役割も山水は果たしていた。『陳書』巻 7、皇后、張貴妃（132 頁）には、

至德二年、乃於光照殿前起臨春、結綺、望仙三閣。閣高数丈、竝数十間、其窗牖、壁帶、懸楣、欄檻之類、竝以沈檀香木為之、又飾以金玉、間以珠翠、外施珠簾、内有宝牀、宝帳、其服玩之属、瑰奇珍麗、近古所未有。每微風暫至、香聞数里、朝日初照、光映後庭。其下積石為山、引水為池、植以奇樹、雜以花菓。（中略）後主每引賓客对貴妃等遊宴、則使諸貴人及女学士与狎客共賦新詩。

至德 2 年（584）、光照殿の前に臨春・結綺・望仙の三閣を建てた。閣の高さは数丈、みな数十間あり、その窓や壁、なげし、てすりの類はすべて沈檀香木で作り、また、金や玉で飾り、真珠と翡翠で仕切り、外には珠簾、内には豪華な寝台と帳があり、調度品は優れて珍しく立派で、近古以来見たことのないものばかりだった。微風が吹いてくるとに香りは数里に広がり、朝日が照ると光が後庭に映った。その下に石を積んで山を築き、水を引いて池を造り、珍しい木を植え、その中に花や菓草を植えた。（中略）後主が賓客を連れてくるたびに、貴妃たちを相手に遊宴し、諸貴人及び女学士に、慣れ親しんでいる客人たちとともに新詩を作らせた。

とある。張貴妃は、陳の後主陳叔宝（在位 582 - 589）のときの貴妃張麗華（- 589）で、後主に寵愛されていた人物である。有力者の贅沢な遊宴のための空間には、豪華な建造物、珍奇な調度品などと同様、その景観的な修飾の為にしばしば山水が用いられた。

豪華な庭園を造営し榮華を誇ることは、後漢以前から見られる事象である。一方、隱逸的趣きを愛し、それに基づいて山水を行動の舞台としたり、人工的に造営したりすることは、江南の山水において特徴的である。これには、当時、隱逸の価値が積極的に評価されるようになったことが影響しているといえよう。政治的分野においても、隱逸や僧などの官職に就かない知識人も重視されていた²⁰。『世説新語』品藻第九、17（中 645 頁）には、
明帝問謝鯤、君自謂何如庾亮。答曰、端委廟堂、使百僚準則、臣不如亮。一丘一壑、自謂過之。

明帝（在位 322 - 325）は、謝鯤にたずねた、「君は、自分では庾亮と比べてどう思うかね」鯤は答えた、「端正に礼服をまとうて朝廷に臨み、百官の模範となる点では、私は庾亮に及びません。けれども丘に棲み、谷門に釣りする楽しみを知る点では、彼にまさると思います」。

とあり、廟堂における価値と、隠逸的な山水における価値を、政治権力の頂点である皇帝の前でさえ、同列に表現している。同時に、官人と、官職に就かない知識人との交流の場としても山水は重要な役割を果たしたと考えられる。

むすび

以上、正史中にみえる「山水」の語の使用例から、正史の中に記された「山水」の表現内容を述べ、その表現内容が、南朝においてそれぞれどのような役割を担っていたのかを考察した。

東晋南朝より前の時代には、「山水」の表現内容としては、「山の水」や「険しい地形」としての面が重視され、南朝からは、「山と水のある風景やその趣」という面が重視されるようになった。その理由としては、高官や官職に就かない有力者（隠逸や僧）などの南朝の有力者たちによって、山や水に囲まれた自然景観がより身近なものと認識されるようになり、同時に山と水のある風景としてのイメージが、従来存在した「山水」ということばを用いることで、はっきりと定着していったためと考えられる。従来は、「山の水」「山と水」という自然状態を示す語であった「山水」の語が、南朝になると「山と水のある風景と、その趣き」という、今日いう風景（landscape or scenery）の意味を持つようになるのである。

南朝において、山水が、風景（landscape or scenery）と認識され、風景としての魅力を持つようになったことにより、山水は、詩や絵画などの芸術の題材や建築における造営の修飾としても用いられるようになった。山水が文化として知識人たちに浸透していくことで、都市の内部にも、文芸・庭園・絵画などの分野で、山水が表現されるようになったのである。このことは、山水に関連する文化を考えるうえで、南朝以降の時代にも大きな影響を与えたといえよう。

注

¹ 『アジア史研究』32、2008年、217 - 240頁。また、「東晋から劉宋初における会稽の山水と知識人」（『アジア史研究』34、2010年、71 - 100頁）のなかでも、山水における隠逸の活動について述べた。

² 上田武「中国古代の隠逸思潮と陶淵明」（上）（下）、（上）『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』29、1996年、41-66頁・（下）同31、1998年、47-68頁。

³ 東京・三省堂、1985年。

- 4 大室幹雄前掲書、「第二章 天地の自明性について 環境Ⅱ 39 頁」のなかで詳述。
- 5 『社科縦横』25、2010 年、91 - 93、100 頁。
- 6 マイケル・サリヴァン著、中野美代子・杉野目康子訳『中国山水画の誕生』東京：青土社、2005 年。（原著 Michael Sullivan, *The Birth of Landscape Painting in China*, Berkeley: University of California press, 1962）
- 7 『六朝学会報』14 号、2013 年、69 - 141 頁、同 15 号、2014 年、77 - 112 頁。
- 8 小川環樹「中国の詩における風景の意義」、『立命館文学』24、1976 年。同「六朝詩人の風景観」、『集刊東洋学』50、1983 年。（両論文とも『小川環樹著作集』第一巻、東京・筑摩書房、1997 年に収録）。
- 9 外村中は、「北周の庾信と南朝建康の東宮の園林および『小園賦』について」（『ランドスケープ研究』65 - 4、334 - 344 頁、2002 年）のなかで、遅くとも 6 世紀までに「山水」「山池」の語がときに園林を意味するようになったと指摘している。
- 10 『南齊書』巻 21、文惠太子長懋（401 頁）「開拓玄圃園、与台城北塹等。其中楼觀塔宇、多聚奇石、妙極山水」。
- 11 たとえば、『南齊書』巻 48、孔稚珪（840 頁）に「不樂世務、居宅盛營山水」とある。
- 12 『歴代名画記』巻 1、「論画山水樹石」に、「山水之変、始於吳成於二李。李將軍、李中舎」とある。吳は吳道玄、李中舎は李思訓の子・李昭道である。また、『歴代名画記』の著者である晩唐の張彦遠によれば、山水を題材とした絵画は、魏晉南北朝期に誕生したものの唐代以前は未熟で稚拙なものであったようである。
- 13 表を作成する際に対象とした史料のなかには、それぞれ「隠逸」やそれに準ずる題を付した篇が収められている。それぞれの史料全文のなかに登場する「山水」の語すべての件数に占める、「隠逸」またはそれに準ずる篇のなかのみの「山水」の語の件数を見てみると、『後漢書』（逸民）0/5、『晋書』（隠逸）1/15、『魏書』（逸士）2/10、『宋書』（隠逸）9/15、『南齊書』（高逸）2/4、『梁書』（処士）1/7、『北史』（隠逸）1/12、『南史』（隠逸）8/26、『隋書』（隠逸）0/3、『旧唐書』（隠逸）1/26 となり、『宋書』では「山水」の語の半分以上が隠逸篇のなかで使用されている。
- 14 『世説新語』賞誉第八、107（目加田誠『世説新語』新釈漢文大系 76・77・78、明治書院、1975・1976・1978 年、中 598 頁を参照。以下、『世説新語』の録文や現代日本語訳はすべて同書を参照・引用した）。「孫興公為庾公參軍、共遊白石山。衛君長在坐、孫曰「此子神情都不関山水、而能作文。庾公曰『衛風韻雖不及卿諸人、傾倒处亦不近』孫遂沐浴此言」。棲逸第十八、16(下 823 頁)。「許掾好遊山水、而体便登陟。時人云「許非徒有勝情、実有所勝之具。」
- 15 『高僧伝』巻 4、康僧淵伝「康僧淵。本西域人。生于長安。貌雖梵人語実中国」。
- 16 『後漢書』巻 34、梁統附冀伝（1181 - 2 頁）には、梁冀の宅と園林について次のような記述がある。「冀乃大起第舍、而寿亦対街為宅、殫極土木、互相誇競。堂寝皆有陰陽奥室、連房洞戸。柱壁雕鏤、加以銅漆、窓牖皆有綺疎青瑱、囟以雲氣仙靈。台閣周通、更相臨望、飛梁石蹬、陵跨水道。金玉珠璣、異方珍怪、充積藏室。遠致汗血名馬。又廣開園囿、採土築山、十里九坂、以像二嶠、深林絶澗、有若自然、奇禽馴獸、飛走其間。冀寿共乘輦車、張羽蓋、飾以金銀、游觀第内、多從倡伎、鳴鍾吹管、酣謳竟路。或連繼日夜、以騁娛恣。客到門不得通、皆請謝門者、門者累千金。又多拓林苑、禁同王家、西至弘農、東界滎陽、南極魯陽、北達河、淇、包含山藪、遠帶丘荒、周旋封域、殆將千里。」梁冀の園林には、山や水辺があり、「有如自然」というから、南朝にみられる人工の「山水」と類似しているが、梁冀の園林には、隠逸的な雰囲気は感じられず、東晋南朝以後特徴的にみられる「山水」と比較すると、趣きの点で異なる。梁冀の園林は、金銭的豊かさや世間での権勢を表現する手段としての山水であるといえる。
- 17 呂舟「中国古代園林發展与浄土和浄土園林」、『「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」の成果について』国立文化財機構奈良文化研究所、2009 年、34 - 8 頁（日本

語訳及び図版 20 - 33 頁) には、「三国時代以降、皇帝権力が弱まり、度重なる政治の変動が両晋時代の社会的特徴となると、大規模な園林の造営は減ったが、文人や士大夫の間に、自然に対する審美観や物への執着といった文人趣味がこの時代の文化に深い影響を与えた。中国園林の発展過程は、主として文人化の過程といえる」とあり、隠逸的な「山水」の登場もこの文人化の過程のひとつと考えられる。

¹⁸ 『陳書』巻 2、高祖本紀、永定元年(557) 10 月(39 頁)「是時久不雨、景午、輿駕幸鍾山、祠蔣帝廟、是日降雨、迄于月晦」。『梁書』巻 51、処士、劉訐(747 頁)「曾与族兄劉歊聽講於鍾山諸寺」。また、『陳書』巻 25、孫瑒(321 頁)「常於山齋設講肆、集玄儒之士、冬夏資奉、為学者所称。而処己率易、不以名位驕物」。山齋とは、『南史』巻 20、謝弘微附挙(564 頁)に「挙宅内山齋捨以為寺、泉石之美、殆若自然。臨川、始興諸王常所游踐。」とあるように、自然の山水または人工の山水のなかに建てられた建物であろう。

¹⁹ 『梁書』巻 3、武帝本紀、太清 2 年(548) 11 月(94 頁)「十一月辛酉、賊攻陷東府城、害南浦侯蕭推・楊中軍司馬楊暉。庚辰、邵陵王綸帥武州刺史蕭弄璋、前譙州刺史趙伯超等入援京師、頓鍾山愛敬寺。」

²⁰ 『南史』巻 76、隱逸下、陶弘景(1899 頁)には、「屡加礼聘、並不出、(中略)武帝笑曰『此人無所不作、欲斂曳尾之龜、豈有可致之理』。国家每有吉凶征討大事、無不前以諮詢。月中常有数信、時人謂為山中宰相」とある。

表1 正史中にみえる「山水」の語の使用例

※「意味」の欄について、水（河川）・山の水・山と水は第1節第一段落の（1）に、地形は（2）に、土地は（3）に、状態や風景は（4）に、山水絵は（5）に、それぞれ相当する。

	史料	使用例	意味	
1	『史記』	『史記』卷二・夏本紀・道九川（p. 69）	道黒水，至于三危，入于南海。【集解】鄭玄曰：「地理志益州滇池有黒水祠，而不記此山水。」	水（河川）
2		『史記』卷二・夏本紀・道九川（p. 70）	歸家道漢，東流為漢，…【正義】括地志云：「歸家山水始出山沮洳，故曰沮水。」	水（河川）
3		『史記』卷十・孝文本紀三年（p. 425）	五月，匈奴入北地，居河南為寇。帝初幸甘泉。…【索隱】應劭云：「宮名，在雲陽。一名林光。」臣瓚云：「甘泉，山名。林光，秦離宮名。」又顧氏按：邢承宗西征賦注云「甘泉，水名」。今按：蓋因地有甘泉以名山，則山水皆通也。	山と水（河川）
4		『史記』卷四十三・趙世家（p. 1802）	十六年，肅侯游大陵，出於鹿門，【正義】并州孟縣西有白鹿泓，源出白鹿山南渚，蓋鹿門在北山水之側也。	水（河川）
5		『史記』卷四十三・趙世家（p. 1832）	七年，秦人攻趙，趙大將李牧，將軍司馬尚將，擊之。李牧誅，司馬尚免，趙忽及齊將顏聚代之。趙忽軍破，顏聚亡去。以王遷廢。【集解】淮南子云：「趙王遷流於房陵，思故鄉，作為山水之謳，聞之者莫不流涕。」	状態や風景
6	『漢書』	『漢書』卷二十七上・五行志第七上・水（p. 1346）	文帝後三年秋，大雨，晝夜不絕三十五日。藍田山水出，流九百餘家。	山の水
7		『漢書』卷二十七上・地理志第八上（p. 1533）	道汧及岐，至于荆山，師古曰：「自此以下，更說所治山水首尾之次也。治山通水，故舉山言之。汧山在汧縣西。道讀曰導。後皆類此。汧音苦堅反。」	山と水
8	『後漢書』	『後漢書』卷五・孝安帝本紀・永初元年（p. 209）	是歲，郡國十八地震；四十一雨水，或山水暴至；二十八風，雨雹。	山の水
9		『後漢書』卷八・孝靈帝本紀・建寧四年（p. 333）	五月，河東地裂，雨雹，山水暴出。	山の水
10		『後漢書』卷七十九・儒林伝・尹敏（p. 2559）	與班彪親善，每相遇，輒日晡忘食，夜分不寢，自以為鍾期伯牙、莊周惠施之相得也。說苑曰，伯牙子鼓琴，其友鍾子期聽之，志在於山水，子期皆知之。子期死，伯牙屏琴絕絃，終身不復鼓琴。	状態や風景
11		『後漢書』志第十五・五行・大水（p. 3309）	安帝永初元年冬十月辛酉，河南新城山水暴出，突壞民田，壞處泉水出，深三丈。	山の水
12		『後漢書』志第十五・五行・大水（p. 3312）	靈帝建寧四年二月，河水清。五月，山水大出，漂壞廬舍五百餘家。	山の水
13	『三国志』	『三国志』魏書・卷十・魏書十二・賈詡伝（p. 331）	吳、蜀雖蕞爾小國，依阻山水，劉備有雄才，諸葛亮善治國，孫權識虛實，陸議見兵勢，據險守要，汎舟江湖，皆難卒謀也。	地形
14		『三国志』魏書・卷十二・魏書十二・鮑勛伝（p. 385）	（黃初）六年秋，帝欲征吳，羣臣大議，勛面諫曰：「王師屢征而未有功者，蓋以吳、蜀唇齒相依，憑阻山水，有難拔之勢故也。」	地形
15		『三国志』魏書・卷二十六・魏書二十六・滿寵伝（p. 722）	羽急攻樊城，樊城得水，往往崩壞，眾皆失色。或謂仁曰：「今日之危，非力所支。可及羽圍未合，乘輕船夜走，雖失城，尚可全身。」寵曰：「山水速疾，冀其不久。」	山の水
16		『三国志』蜀書・卷四十二・蜀書十二・譙周伝（p. 723）	蜀土險狹，山水峻隔，絕巘激湍，非步卒所涉。	地形
17		『三国志』蜀書・卷四十五・蜀書十五・宗預伝（p. 1076）	況乎居偏鄙之城，恃山水之固，而欲連橫萬里，水相資賴哉？	地形
18	『晋書』	『晋書』卷九・太宗簡文帝本紀・咸安二年三月条（p. 222）	夫肥遁窮谷之賢，滑泥揚波之士，雖抗志玄霄，潛默幽岫，貪屈高尚之道，以隆協贊之美，孰與自足山水，棲遲丘壑，徇匹夫之潔，而忘兼濟之大邪？	
19		『晋書』卷三十二・后妃下・孝武李文太后（p. 981）	會有道士許邁者，朝臣時望多稱其得道。帝從容問焉，答曰：「邁是好山水人，本無道術，斯事豈所能判！」	状態や風景
20		『晋書』卷三十四・羊祜伝（p. 1020）	祜樂山水，每風景，必造峴山，置酒言詠，終日不倦。	状態や風景
21		『晋書』卷四十九・阮籍伝（p. 1359）	或閉戶視書，累月不出；或登臨山水，經日忘歸。	状態や風景
22		『晋書』卷五十五・潘岳伝（p. 1504）	宋幾，遷為長安令，作西征賦，述所經人物山水，文清旨詣，辭多不錄。	状態や風景
23		『晋書』卷五十六・孫統伝（p. 1543）	性好山水，乃求為鄆令，轉在吳寧。	状態や風景
24		『晋書』卷五十六・孫綽伝（p. 1544）	居于會稽，游放山水，十有餘年，乃作遂初賦以致其意。	状態や風景・土地
25		『晋書』卷七十四・石祕伝（p. 1947）	祕於是廢棄，遂居於墓所，放志田園，好遊山水。	状態や風景・土地
26		『晋書』卷七十九・謝安伝（p. 2072）	寓居會稽，與王羲之及高陽許詢、桑門支遁遊處，出則漁弋山水，入則言詠屬文，無處世意。	土地
27		『晋書』卷八十・王羲之伝（p. 2098）	會稽有佳山水，名士多居之，謝安未仕時亦居焉。	状態や風景
28		『晋書』卷八十・王羲之伝（p. 2101）	羲之既去官，與東士人士盡山水之游，弋釣為娛。	状態や風景・土地
29		『晋書』卷八十八・孝友伝・孫晷（p. 2284）	兄嘗篤疾經年，晷躬自扶持，藥石甘苦，必經心目，跋涉山水，祈求懇至。	土地
30		『晋書』卷八十八・隱逸伝・郭文（p. 2440）	少愛山水，尚嘉遁。	状態や風景
31		『晋書』卷百十四・載記・苻朗伝（p. 2936）	及為方伯，有若素士，耽詠經籍，手不釋卷，每談虛語玄，不覺日之將夕；登涉山水，不知老之將至。	土地
32		『晋書』卷百十八・載記・姚興伝（p. 2994）	興以國用不足，增關津之稅，鹽竹山木皆有賦焉。羣臣咸諫，以為天殖品物以養羣生，王者子育萬邦，不宜節約以奪其利。興曰：「能踰關梁通利於山水者，皆豪富之家。吾損有餘以裨不足，有何不可！」乃遂行之。	土地

33	『魏書』	『魏書』卷二十一・彭城王勰伝 (p. 581)	勰既無 山水 之適，又絕知己之遊，唯對妻子，鬱鬱不樂。	狀態や風景	114巻。(北齊)魏收撰;西魏書(清)謝朓昆撰
34		『魏書』卷四十一・源子恭伝 (pp. 932-3)	又稱心存 山水 ，不好榮宦，屢曾辭讓，貽彼赫怒，遂被出為齊康郡。	狀態や風景	
35		『魏書』卷六十六・崔亮伝 (p. 1477)	會天大雨， 山水 暴至，浮出長木數百根。	山の水	
36		『魏書』卷七十一・裴衍伝 (p. 1575)	臣質無靈分，性乖 山水 ，非敢追踵輕舉，髣髴高蹤，誠希垂此沉痾，全養寧氣耳。	狀態や風景	
37		『魏書』卷八十・侯莫陳悅伝 (p. 1785)	悅聞之，棄城，南據 山水 之險，設陳候戰。	地形	
38		『魏書』卷八十二・常景伝 (p. 1804)	景經涉 山水 ，悵然懷古，乃擬劉琨扶風歌十二首。	狀態や風景・土地	
39		『魏書』卷九十・逸士伝・馮亮 (p. 1931)	亮既雅愛 山水 ，又兼巧思，結架巖林，甚得栖游之適，頗以此聞。	狀態や風景	
40	『宋書』	『魏書』卷九十・逸士伝・李謐 (p. 1937)	謐不飲酒，好音律，愛樂 山水 ，高尚之情，長而彌固，一遇其賞，悠爾忘歸。	狀態や風景	100巻。(梁)沈約撰
41		『魏書』卷九十・術芸伝・張淵 (p. 1953)	於是乎夜對 山水 ，栖心高鏡。遠尋終古，攸然獨詠。美景星之繼晷，大唐堯之德盛。	狀態や風景	
42		『魏書』卷九十六・僭晉司馬叡伝 (p. 2092)	遂都於丹陽，因孫權之舊所，即禹貢揚州之地，去洛二千七百里。地多 山水 ，陽鳥攸居，厥土惟塗泥，厥田惟下下，所謂「島夷卉服」者也。	狀態や風景	
43		『宋書』卷六十二・羊欣伝 (p. 1662)	太祖重之，以為新安太守，前後凡十三年，游玩 山水 ，甚得適性。	狀態や風景・土地	
44		『宋書』卷六十二・王微伝 (p. 1669)	又性知畫績，蓋亦鳴鶴識夜之機，盤紆糾紛，或記心目，故兼 山水 之愛，一往跡求，皆仿像也。	狀態や風景	
45		『宋書』卷六十六・王敬弘伝 (p. 1729)	性恬靜，樂 山水 。	狀態や風景	
46		『宋書』卷六十七・謝靈運伝 (p. 1753)	郡有名 山水 ，靈運素所愛好，出守既不得志，遂肆意游遨，徧歷諸縣，動踰旬朔，民間聽訟，不復關懷。	狀態や風景	
47		『宋書』卷六十七・謝靈運伝 (p. 1767)	因以小湖，鄰於其限。眾流所湊，萬泉所回。汎濫異形，首尾終肥。別有 山水 ，路邊細歸。汎濫、肥甚，皆是泉名，事見於詩。云此萬泉所湊，各有形勢。	土地	
48	『宋書』	『宋書』卷七十二・文九王・建平宣簡王宏伝 (p. 1858)	太祖寵愛殊常，為立第於鷓鴣山，盡 山水 之美。	狀態や風景	59巻。(梁)蕭子顯撰
49		『宋書』卷九十三・隱逸伝・宗炳 (p. 2278)	妙善琴書，精於言理，每游 山水 ，往輒忘歸。	狀態や風景・土地	
50		『宋書』卷九十三・隱逸伝・宗炳 (p. 2279)	好 山水 ，愛遠遊，西陟荆、巫，南登衡岳，因而結宇衡山，欲徂尚平之志。	狀態や風景	
51		『宋書』卷九十三・隱逸伝・王弘之 (p. 2281)	家貧，而性好 山水 ，求為烏程令，尋以病歸。	狀態や風景	
52		『宋書』卷九十三・隱逸伝・王弘之 (p. 2282)	始寧沃川有佳 山水 ，弘之又依巖築室。	狀態や風景	
53		『宋書』卷九十三・隱逸伝・王弘之 (p. 2282)	會境既豐 山水 ，是以江左嘉遁，並多居之。但季世慕榮，幽棲者寡，或復才為時求，弗復從志。	狀態や風景	
54		『宋書』卷九十三・隱逸伝・孔淳之 (p. 2283)	居會稽剡縣，性好 山水 ，每有所游，必窮其幽峻，或旬日忘歸。	狀態や風景	
55		『宋書』卷九十三・隱逸伝・劉凝之 (p. 2285)	性好 山水 ，一旦攜妻子泛江湖，隱居衡山之陽。	狀態や風景	
56		『宋書』卷九十三・隱逸伝・沈道虔 (p. 2291)	孫恩亂後飢荒，縣令庾廩之迎出縣南廢頭里，為立小宅，臨澗，有 山水 之玩。	狀態や風景	
57		『宋書』卷九十三・隱逸伝・雷次宗 (p. 2293)	爰有 山水 之好，悟言之歡，實足以通理輔性，成夫聲譽之業，樂以忘憂，不知朝日之晏矣。	狀態や風景	
58	『南齊書』	『南齊書』卷二十一・文惠太子長懋伝 (p. 401)	宮內殿堂，皆雕飾精綺，過於上宮。開拓玄圃園，與臺城北甃等。其中樓觀塔宇，多聚奇石，妙極 山水 。	狀態や風景	56巻。(隋)姚察，(隋)謝朓，(唐)魏徵，(唐)姚思廉合撰
59		『南齊書』卷四十八・孔稚珪伝 (p. 840)	不樂世務，居宅盛營 山水 ，憑机獨酌，傍無雜事。	狀態や風景	
60		『南齊書』卷五十四・高逸伝・沈麟士 (p. 943)	麟士聞郡後堂有好 山水 ，乃往停數月。	狀態や風景	
61		『南齊書』卷五十四・高逸伝・徐伯珍 (p. 945)	山水 暴出，漂溺宅舍，村隣皆奔走，伯珍累床而止，讀書不輟。	山の水	
62	『梁書』	『梁書』卷八・昭明太子統伝 (p. 168)	性愛 山水 ，於玄圃穿築，更立亭館，與朝士名素者遊其中。	狀態や風景	36巻。(隋)姚察，(唐)魏徵，姚思廉合撰
63		『梁書』卷八・昭明太子統伝 (p. 168)	嘗泛舟後池，番禺侯軌盛稱「此中宜奏女樂」。太子不答，詠左思招隱詩曰：「何必絲與竹， 山水 有清音。」	狀態や風景	
64		『梁書』卷十六・張稷伝 (p. 271)	齊永明中，為剡縣令，略不視事，多為 山水 遊。	狀態や風景	
65		『梁書』卷三十・徐摛伝 (p. 447)	高祖謂摛欲之，乃召摛曰：「新安大好 山水 ，任昉等並經為之，卿為我臥治此郡。」中大通三年，遂出為新安太守。	狀態や風景	
66		『梁書』卷三十二・陳慶之伝 (p. 463)	慶之馬步數千，結陳東反，榮親自來追，值高 山水 洪溢，重人死歿。	山の水	
67		『梁書』卷四十一・蕭幾伝 (p. 597)	為新安太守，郡多 山水 ，特其所好，適性遊履，遂為之記。	狀態や風景	
68		『梁書』卷五十一・処士・劉歊伝 (p. 748)	及長，博學有文才，不娶不仕，與族弟訢並隱居求志，遨遊林澤，以 山水 書籍相娛而已。	狀態や風景	
69	『陳書』	『陳書』卷一・高祖霸先本紀 (p. 1)	寔玄孫準，晉太尉。準生匡，匡生達，永嘉南遷，為丞相掾，歷太子洗馬，出為長城令，悅其 山水 ，遂家焉。嘗謂所親曰：「此地山川秀麗，富有王者興，二百年後，我子孫必鍾斯運。」	狀態や風景	50巻。(唐)李百藥撰
70		『陳書』卷一・高祖霸先本紀 (p. 4)	大寶元年正月，高祖發自始興，次大庾嶺。路養出軍頓南野，依 山水 立四城以拒高祖。	地形	
71		『陳書』卷一・高祖霸先本紀・永定二年三月条 (p. 36)	乙卯，高祖幸後堂聽訟，還於橋上觀 山水 ，賦詩示羣臣。	狀態や風景	
72	『北齊書』	『北齊書』卷二十四・杜弼伝 (p. 357)	賢愚可察；鍾生聽曲， 山水 呈狀。乃神之工，豈神之質。猶玉帛之非禮，鍾鼓之非樂，以此而推，義斯見矣。	狀態や風景	36巻。(隋)姚察，(唐)魏徵，姚思廉合撰
73		『北齊書』卷三十一・王昕伝 (p. 417)	遨遊羣洛，悅其 山水 ，與范陽盧元明、鉅鹿魏季景結侶同契，往天陵山，浩然有終焉之志。	狀態や風景	
74		『北齊書』卷三十一・王昕附弟伝 (p. 422)	良辰美景，嘯咏遨遊，登臨 山水 ，以談讌為事，人士謂之物外司馬。	狀態や風景・土地	
75		『北齊書』卷三十一・楊愔伝 (p. 454)	性既恬默，又好 山水 ，遂入晉陽西懸甕山讀書。	狀態や風景	
76		『北齊書』卷三十六・邢昺伝 (p. 475)	少在洛陽，會天下無事，與時名勝專以 山水 遊宴為娛，不暇勤業。	狀態や風景	
77		『北齊書』卷三十七・魏收伝 (p. 491)	帝於華林別起玄苑苑，備 山水 臺觀之麗，詔於閣上畫收，其見重如此。	狀態や風景	
78		『北齊書』卷四十五・文苑伝・顔之推 (觀我生賦) (p. 624)	諫譖言之矛戟，惕險情之 山水 ，由重裘以寒勝，用去薪而沸止。	地形・狀態や風景	

79	『隋書』	『隋書』卷八十一・東夷伝・靺鞨 (p. 1821)	所居多依 山水 ，渠帥曰大莫弗瞞咄，東夷中為強國。	土地	85卷。(唐)魏徵等撰
80	『南史』	『南史』卷九・陳本紀・武帝陳霸先 (p. 257)	寔玄孫晉太尉準。準生匡，匡生達，永嘉中南遷，為丞相掾，太子洗馬，出為長城令，悅其 山水 ，遂家焉。嘗謂所親曰：「此地山川秀麗，當有王者興焉，二百年後，我子孫必鍾斯運。」	狀態や風景	80卷。(唐)李延壽撰
81		『南史』卷十四・宋宗室及諸王・宋文帝諸子・建平宣簡王宏伝 (p. 400)	宏少而閑素，篤好文籍，文帝寵愛殊常，為立第於鍾山，盡 山水 之美。	狀態や風景	
82		『南史』卷十九・謝靈運伝 (p. 538)	郡有名 山水 ，靈運素所愛好。	狀態や風景	
83		『南史』卷二十四・王裕之（敬弘）伝 (p. 649)	性恬靜，樂 山水 ，求為天門太守。	狀態や風景	
84		『南史』卷二十四・王弘之伝 (p. 655)	家貧，性好 山水 ，求為烏傷令。	狀態や風景	
85		『南史』卷二十四・王弘之伝 (p. 656)	始寧沃川有佳 山水 ，弘之又依巖築室。	狀態や風景	
86		『南史』卷二十四・王弘之伝 (p. 656)	會境既豐 山水 ，是以江左嘉遁，並多居之。	狀態や風景	
87		『南史』卷三十六・羊欣伝 (p. 932)	在郡十三年，樂其 山水 ，嘗謂子弟曰：「人生仕宦至二千石，斯可矣。」	狀態や風景	
88		『南史』卷四十一・曲江公遙欣附幾伝 (p. 1043)	為新安太守，郡多 山水 ，特其所好，適性遊履，遂為之記。	狀態や風景・土地	
89		『南史』卷四十一・齊高帝諸子・豫章文獻王嶷附子顯伝 (p. 1073)	性愛 山水 ，為伐社文以見其志。	狀態や風景	
90		『南史』卷四十四・齊武帝諸子・文惠皇太子長懋伝 (p. 1100)	太子與竟陵王子良俱好釋氏，立六疾館以養窮人。而性頗奢麗，宮內殿堂，皆雕飾精綺，過於上宮。開拓玄圃園與臺城北甃等，其中起出土山池閣樓觀塔宇，窮奇極麗，費以千萬。多聚異石，妙極 山水 。	狀態や風景	
91		『南史』卷四十四・齊武帝諸子・竟陵文宣王子良附書伝 (p. 1106)	幼好學，有文才，能書善畫，於扇上圖 山水 ，咫尺之內，便覺萬里為遙。	狀態や風景	
92		『南史』卷四十九・孔珪伝 (p. 1215)	居宅盛營 山水 ，憑几獨酌，傍無雜事。	狀態や風景	
93		『南史』卷四十九・劉昭附歊伝 (pp. 1224-5)	及長，博學有文才，不要不仕，與族弟詒並隱居求志，遨遊林澤，以 山水 書籍相娛而已。	狀態や風景	
94		『南史』卷四十九・劉昭附歊伝 (pp. 1225)	性重興樂，尤愛 山水 ，登危履峻，必盡幽遐，人莫能及，皆歎其有濟勝之具。	狀態や風景	
95		『南史』卷五十三・梁武帝諸子・昭明太子統伝 (p. 1106)	性愛 山水 ，於玄圃穿築，更立亭館，與朝士名素者遊其中。	狀態や風景	
96		『南史』卷五十三・梁武帝諸子・昭明太子統伝 (p. 1106)	嘗泛舟後池，番禺侯軌盛稱 此中宜奏女樂。太子不答，詠左思招隱詩云：「何必絲與竹， 山水 有清音。」	狀態や風景	
97		『南史』卷六十二・徐摘伝 (p. 1521)	帝謂摘 欲之，乃召摘曰：「新安大好 山水 ，任昉等並經為之，卿為我臨此郡。」中大通三年，遂出為新安太守。	狀態や風景	
98		『南史』卷七十五・隱逸伝宗少文 (p. 1860)	少文妙善琴書圖畫，精於言理，每游 山水 ，往輒忘歸。	狀態や風景・土地	
99		『南史』卷七十五・隱逸伝宗少文 (p. 1861)	好 山水 ，愛遠遊，西陟荆、巫，南登衡岳，因結宇衡山，欲懷尚平之志。	狀態や風景	
100		『南史』卷七十五・隱逸伝沈道虔 (p. 1863)	孫恩亂後饑荒，縣令庾肅之迎出縣南廢頭里，為立宅臨溪，有 山水 之玩。	狀態や風景	
101		『南史』卷七十五・隱逸伝孔淳之 (p. 1864)	性好 山水 ，每有所游，必窮其幽峻，或旬日忘歸。	狀態や風景	
102		『南史』卷七十五・隱逸伝劉凝之 (p. 1869)	性好 山水 ，一旦攜妻子泛江湖，隱居衡山之陽，登高嶺，絕人迹，為小屋居之。	狀態や風景	
103		『南史』卷七十六・隱逸伝徐伯珍 (p. 1889)	山水 暴出，漂溺宅舍，村鄰皆奔走，伯珍累牀而坐，誦書不輟。	山の水	
104		『南史』卷七十六・隱逸伝沈麟士 (p. 1891)	麟士開郡後堂有好 山水 ，即戴安道游吳興，因古墓為山池也。	狀態や風景	
105		『南史』卷七十六・隱逸伝陶弘景 (pp. 1897-8)	身既輕捷，性愛 山水 ，每經澗谷，必坐臥其間，吟詠盤桓，不能已已。	狀態や風景	
106	『北史』	『北史』卷二十四・王憲附暉伝 (p. 885)	暉願養母，竟不受署。母終後，仍屬遷鄴，遨遊臺、洛，悅其 山水 。	狀態や風景	100卷。(唐)李延壽撰
107		『北史』卷二十四・王憲附暉伝 (pp. 890-1)	良辰美景，嘯詠遨遊，登臨 山水 ，以談讌為事，人士謂之「方外司馬」。	狀態や風景・土地	
108		『北史』卷三十三・李孝伯附謹伝 (p. 1230)	謹不飲酒，好音律，愛樂 山水 ，高尚之情，長而彌固，一遇其賞，悠爾忘歸，乃作神士賦。	狀態や風景	
109		『北史』卷三十三・李孝伯附愔伝 (p. 1231)	正光中，隨父之并州，性既恬默，又好 山水 ，遂入晉陽西縣建山讀書。	狀態や風景	
110		『北史』卷四十二・常爽附景伝 (p. 1558)	景經涉 山水 ，悵然懷古，乃擬劉琨扶風歌十二首。	土地	
111		『北史』卷四十二・邢昺附卽伝 (p. 1588)	少在洛陽，會天下無事，與時名勝，專以 山水 游宴為娛，不暇勤業。	狀態や風景	
112		『北史』卷四十四・崔亮伝 (p. 1631)	會天大雨， 山水 暴至，浮出長木數百根，籍此為用，橋遂成立。	山の水	
113		『北史』卷四十九・侯莫陳悅伝 (p. 1804)	悅聞之，棄城南據 山水 之險。	地形	
114		『北史』卷五十六・魏收伝 (p. 2034)	收畏避，不能匡救，為議者所譏。帝於華林別起玄洲苑，備 山水 臺觀之麗，詔於閣上畫收，其見重如此。	狀態や風景	
115		『北史』卷八十八・隱逸伝馮亮 (p. 2910)	亮既雅愛 山水 ，又兼工思，結架巖林，甚得栖遊之適。	狀態や風景	
116		『北史』卷九十二・恩幸伝韓鳳 (p. 3052)	東西巡幸，及 山水 游戲射獵，獨在御傍。	狀態や風景	
117		『北史』卷九十四・勿吉伝 (p. 3124)	東夷中為強國。所居多依 山水 。渠帥曰大莫弗瞞咄。	土地	

118	『旧唐書』	『旧唐書』卷六・則天皇后武曌本紀・長安三年六月条(p. 131)	六月，寧州雨， 山水暴漲 ，漂流二千餘家，溺死者千餘人。	山の水	200卷。(後晉)劉昫撰
119		『旧唐書』卷六・玄宗李隆基本紀・開元五年六月条(p. 178)	六月壬午，鞏縣暴雨連月， 山水 泛濫，毀郭邑廬舍七百餘家，人死者七十二。	山の水	
120		『旧唐書』卷六・玄宗李隆基本紀・天宝元年六月条(p. 215)	夏六月庚寅，武功 山水 暴漲，壞人廬舍，溺死數百人。	山の水	
121		『旧唐書』卷六・玄宗李隆基本紀・天宝五載正月条(p. 219)	封中嶽為中天王，南嶽為司天王，北嶽為安天王。天下 山水 ，名稱或同，義且不經，多因於里諺，宜令所司各據圖籍改定。	山と水（河川）	
122		『旧唐書』卷十六・穆宗李恆本紀・長慶二年七月条(p. 498)	好時縣 山水 漂溺居人三百家。	山の水	
123		『旧唐書』卷三十・音樂志・則天皇后永昌元年大享祥洛樂章十五首(pp. 1114-5)	武舞用德和：夕揚司龍契，晨號當鳳展。崇儒習舊規，偃霸循先旨。絕壤飛冠蓋，遐區麗 山水 。幸承三聖餘，忻屬千年始。	状態や風景	
124		『旧唐書』卷三十七・五行志・水災(p. 1352)	咸亨元年五月十四日，連日澍雨， 山水 溢，溺死五千餘人。	山の水	
125		『旧唐書』卷三十七・五行志・水災(p. 1353)	長安三年，寧州大霖雨， 山水 暴漲，漂流二千餘家，溺死者千餘人，流屍東下。	山の水	
126		『旧唐書』卷三十七・五行志・水災(p. 1357)	開元五年六月十四日，鞏縣暴雨連日， 山水 泛漲，壞郭邑廬舍七百餘家，人死者七十二。	山の水	
127		『旧唐書』卷三十七・五行志・水災(p. 1357)	夜半， 山水 暴至，二萬餘人皆溺死，唯行網役夫楊滿，覺水至，獲免逆旅之家，溺死死人漂入苑中如積。	山の水	
128		『旧唐書』卷三十七・五行志・水災(p. 1360)	五月，饒、撫、虔、吉、信五州 山水 暴漲，壞廬舍，虔州尤甚，水深處四丈餘。	山の水	
129		『旧唐書』卷三十七・五行志・水災(p. 1360)	衢州 山水 涌，深三丈，壞州城，民多溺死。	山の水	
130		『旧唐書』卷三十七・五行志・水災(p. 1360)	長慶二年十月，好時 山水 泛漲，漂損居人三百餘家，河南陳、許二州尤甚。	山の水	
131		『旧唐書』卷三十七・五行志・獸異(p. 1371)	旬日內桂陽大雨，山水暴溢，漂五百家，殺三百餘人。	山の水	
132		『旧唐書』卷六十・長平王叔良附思訓伝(p. 2346)	思訓尤善丹青，迄今繪事者推李將軍 山水 。	山水絵	
133		『旧唐書』卷七十二・劉孝孫伝(p. 2583)	孝孫弱冠知名，與當時辭人虞世南、蔡君和、孔德紹、庾抱、庾自直、劉斌等登臨 山水 ，結為文會。	状態や風景・土地	
134		『旧唐書』卷八十三・薛仁貴伝(pp. 2780-1)	永徽五年，高宗幸萬年宮，甲夜， 山水 猥至，衝突玄武門，宿衛者散走。仁貴曰：「安有天子有急，輒敢懼死？」遂登門桃叫呼以驚宮內。高宗遽出乘高，俄而水入寢殿，上使謂仁貴曰：「賴得卿呼，方免淪溺，始知有忠臣也。」於是賜御馬一匹。	山の水	
135		『旧唐書』卷百三・張守珪伝(p. 3194)	守珪設祭祈禱，經宿而 山水 暴至，大漂材木，塞澗而流，直至城下。	山の水	
136		『旧唐書』卷百五・宇文融伝(p. 3218)	但責其疆界，嚴之隄防， 山水 之餘，即為見地。	地形・土地	
137		『旧唐書』卷百十九・崔祐甫附植伝(p. 3442)	（宋）環嘗手寫尚書無逸一篇，為圖以獻。玄宗置之內殿，出入觀省，咸記在心，每歎古人至言，後代莫及，故任賢戒慾，心歸冲漠。開元之末，因無逸圖朽壞，始以 山水 圖代之。	状態や風景	
138		『旧唐書』卷百六十四・楊於陵伝(p. 4292)	於陵自江西府罷，以婦翁權幸方熾，不欲進取，乃卜築於建昌，以讀書 山水 為樂。	状態や風景	
139		『旧唐書』卷百六十六・元稹伝(p. 4336)	曾稽 山水 奇秀，稹所辟幕職，皆當時文士，而鏡湖、秦望之遊，月三四焉。	状態や風景	
140		『旧唐書』卷百六十六・白居易伝(p. 4346)	晉、宋已還，得者蓋寡。以康樂之奧博，多溺於 山水 ；以淵明之高古，偏放於田園。	状態や風景	
141		『旧唐書』卷百八十八・孝友伝梁文貞(p. 4347)	其後 山水 衝斷驛路，更於原上開道，經文貞墓前。	山の水	
142		『旧唐書』卷百九十・文苑伝元德秀(p. 5051)	秩滿，南遊陸渾，見佳 山水 ，杳然有長往之志，乃結廬山阿。	状態や風景	
143		『旧唐書』卷百九十・文苑伝王維(p. 5052)	書畫特臻其妙，筆蹤構思，參於造化，而創意經圖，即有所缺，如 山水 平遠，雲峯石色，絕迹天機，非繪者之所及也。	状態や風景	
144		『旧唐書』卷百九十二・隱逸伝田遊巖(p. 5117)	其母及妻子並有方外之志，與遊巖同遊 山水 二十餘年。	状態や風景・土地	
145		『旧唐書』卷百九十九・北狄・靺鞨(p. 5358)	無屋宇，並依 山水 掘地為穴，架不於上，以土覆之，狀如中國之塚墓，相聚而居。	土地	

146	『新唐書』	卷三十六・五行志・水 (p. 928)	永徽元年六月，新豐、渭南大雨，零口 山水 暴出，漂廬舍。	山の水	226巻。（北宋）歐陽脩撰
147		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 928)	五年五月丁丑夜，大雨，麟遊縣 山水 衝萬年宮玄武門。	山の水	
148		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 928)	顯慶元年七月，宣州涇縣 山水 暴出，平地四丈，溺死者二千餘人。	山の水	
149		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 928)	四年七月，連州 山水 暴出，漂七百餘家。	山の水	
150		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 929)	咸亨元年五月丙戌，大雨， 山水 溢，溺死五千餘人。	山の水	
151		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 929)	二年八月，徐州 山水 漂百餘家。	山の水	
152		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 929)	四年七月，婺州大雨， 山水 暴漲，溺死五千餘人。	山の水	
153		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 929)	八月，恆州滹沱河及 山水 暴溢，害稼。	山の水	
154		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 930)	八年夏，契丹寇營州，發關中卒援之，宿澠池之缺門，營穀水上，夜半， 山水 暴至，萬餘人皆溺死。	山の水	
155		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 932)	永貞元年夏，朗州之熊、武五溪溢。秋，武陵、龍陽二縣江水溢，漂萬餘家。京畿長安等九縣 山水 害稼。	山の水	
156		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 933)	衢州 山水 害稼，深三丈，毀州郭，溺死百餘人。	山の水	
157		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 933)	好畤 山水 漂民居三百餘家。	山の水	
158		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 933)	睦州及壽州之霍山 山水 暴出。	山の水	
159		『新唐書』卷三十六・五行志・水 (p. 935)	九月，孝義 山水 深三丈，破武牢關金城門汜水橋。	山の水	
160		『新唐書』卷四十一・地理志・江南道・杭州予杭郡 (p. 1059)	姚又築甬道，通西北大路，高廣徑直百餘里，行旅無 山水 之患。	地形	
161		『新唐書』卷七十八・宗室・彭国公思訓伝 (p. 3520)	思訓善畫，世所謂「李將軍 山水 」者。	山水絵	
162		『新唐書』卷一百六・邢文偉伝 (pp. 4057, 8)	伯牙鼓琴，鍾期聽之，知意在 山水 ，是人能移風易俗矣。	状態や風景	
163		『新唐書』卷一百五十・薛仁貴伝 (p. 4140)	高宗幸萬年宮， 山水 暴至，夜突玄武門，宿衛皆散走。	山の水	
164		『新唐書』卷一百一十二・員半千伝 (p. 4162)	半千事五君，有清白節，年老不衰，樂 山水 自放。開元九年，遊堯山、沮水間，愛其地，遂定居。	状態や風景・土地	
165		『新唐書』卷一百四十二・崔祐甫附植伝 (p. 4669)	環嘗手寫尚書無逸，為圖以獻，勸帝出入觀省以自戒。其後朽暗，乃代以 山水 圖，稍怠于勤，左右不復箴規，姦臣日用事，以至于敗。	状態や風景	
166		『新唐書』卷一百六十七・王播附龜伝 (p. 5119)	崔瑗觀察宣歙，表為副，龜樂宛陵 山水 ，故從之。	土地	
167		『新唐書』卷一百九十四・元德秀伝 (p. 5564)	愛陸渾佳 山水 ，乃定居。	状態や風景・土地	
168		『新唐書』卷一百九十六・隱逸・田游巖伝 (p. 5598)	母及妻皆有方外志，與共棲遲 山水 間。	状態や風景・土地	
169		『新唐書』卷一百九十六・隱逸・張志和伝 (p. 5609)	善圖 山水 ，酒酣，或擊鼓吹笛，紙筆輒成。	状態や風景	
170		『新唐書』卷二百二・文芸・王維伝 (p. 5765)	畫思入神，至 山水 平遠，雲勢石色，繪工以為天機所到，學者不及也。	状態や風景	
171		『新唐書』卷二百二・文芸・鄭虔伝 (p. 5766)	虔善圖 山水 ，好書，常苦無紙，於是慈恩寺貯柿葉數屋，遂往日取葉書，歲久殆遍。	状態や風景	
172		『新唐書』卷二百一十九・北狄・黑水靺鞨伝 (p. 6178)	居無室廬，負 山水 坎地，梁木其上，覆以土，如丘冢然。	地形	